

喫煙・副流煙の脅威

内科学講座 腎臓内科部門 深水 圭

タバコ副流煙の恐怖—これはタバコを吸わない人必読のハンドブックであり、2002年に発刊された医学博士宮本順伯執筆の本である。あれから14年が経過し、現在では東京オリンピックを4年後に控え、日本人の喫煙率の高さが海外から批判を浴びている。最近驚くべき結果が公表された。家庭や職場などで受動喫煙が原因で死亡した非喫煙者の人数は、国内で年間1万5,000人に上るとの推計を厚生労働省の研究班がまとめ、2016年世界禁煙デーである5月31日に発表した。久留米大学医学部の学生・医師の喫煙率はいかほどであろうか？喫煙者の中でも生命を守る立場である医学生・医師は率先して禁煙を目指してほしい。

最も重篤な喫煙の合併症はなんといっても発癌である。因果関係の有無について調べた結果（国際癌研究機関 ヒトへの発がん性リスク評価モノグラフ第83巻、2002年）では、口腔癌、鼻腔・副鼻腔癌、中咽頭癌、下咽頭癌、食道癌、胃癌、肝臓癌、膵臓癌、肺癌、子宮頸癌、尿路癌、白血病など、喫煙はほとんどの癌発症に関与していた。タバコの煙の中にはニコチンやタールなどタバコ自身の有害物質に加え、不完全燃焼することにより産生される多環芳香族炭化水素化合物やニトロソアミン類をはじめとする発癌物質が数十種類含まれている。これら有毒物質が細胞のDNA損傷を来し、癌発症に関与していることが示唆される。

一方、受動喫煙との因果関係が確実とされる疾患としては、肺癌、脳卒中、心筋梗塞、乳幼児突然死症候群（SIDS）が挙げられる。両親とも喫煙者でのSIDS発症リスクは、なんと非喫煙夫婦の約5倍、母親の受動喫煙だけで2~3倍に上昇する。さらに4万4,595人の子供に関して、妊娠中に喫煙をすると、3才児における尿蛋白の出現頻度が有意に上昇することが報告された。実際喫煙している妊婦から生まれた子の尿中ニコチン（ニコチンの代謝産物）を測定したところ、尿にニコチンが検出され、タバコ由来の有害物質は容易に胎盤を通過すると考えられることから、胎児の成長過程において副流煙による有害物質が胎児の臓器発達障害を惹起する可能性が示唆される。未来ある子供達の将来を想うと、喫煙がいかに社会的に悪影響を与えているかを真剣に考える必要がある。

“百害あって一利なし”まさにタバコの弊害を表すために生まれてきたことわざである。東京オリンピックを見据え、飲食店での全面禁煙が実施される可能性も示唆されている。一説によると、副流煙は喫煙よりも害があるといわれており、副流煙により将来の子供の健康が脅かされるかもしれない。政府も東京オリンピック開催に向け、禁煙社会を実現させようと必死に取り組んでいる。これを機会に、現在喫煙をしている医学生・医師が勇気をもって禁煙をすることに是非期待したい。そのきっかけとして“タバコ副流煙の恐怖”を一読して頂ければ幸いである。